

# 自己を相対化するために学び読む 世界と向き合う基盤を築くことだ それを欠くとひとりよがりになる



永田 和宏

## 一步先のあなたへ

### 14 何のために勉強するの？

彼女は世界の中心にいる。天動説のようなもので、自分では何もなくても、すべてが彼女のまわりをまわっている。世界を所有し、世界は包んでほかれても、対峙することはない。

保育園や幼稚園に行くようになって、同じような年齢層の「他者」に初めて出会う。ここで「他者」を知ることが、すなわち自分という存在を意識する最初の経験となるだろう。世界は自分のためだけにまわっているのではないことを初めて知る。

「他者」を知ることによって初めて「自己」というものへの意識が芽生える。「自我のめぼえ」は、「他者」によって意識される「自己」への視線である。自分を外から見るといふ経験、これはすなわち学ぼうといふことの最初の経験なのである。

なんのために学問をするのかと言つと難しそうだし、なんのために勉強をするのかと問うとしんどいことである。もう少し端的に、なんのために本を読むのかと問うてみてほしい。

ひとつはつきりしているのは、自分を客観的に眺める、すなわち「自己」を相対化する視線を与えてくれるということだ。どんな読書の場合にもあてはまることである。

こんなことを考えている人がいたのかと思う。こんな辛い別れがあったのか、こんな辛くむ。「読む」という行為の前には、知らなかった世界ばかりである。それを知るといふことは、すなわち「それを知らなかった自分」を知るといふことである。

一冊の書物を読めば、その分、自分を見る新しい視線が自分のなかに生まれる。「自己」の相対化とはそういうことである。



勉強するのは、そのためである。読書にしても、勉強にしても、それは知識を広げるといふことも確かにその通りだが、もっと大切なことは、自分を客観的に眺めるための、新しい場所を獲得するという意味のほう

が大きい。小さな子が他者と出会って、自分に気づいたように、私たちは「自己」をいろいろな

角度から見ると、複数の視線を得るために、勉強をし、読書をする。それを欠くと、ひとりよがりの自分を抜け出すことができない。「他者」との関係性を築くことができない。

勉強や読書は、自分では持たない時間を持つということである。過去の多くの時間に出会うということでもある。過去の時間を所有する。それもまた、自分だけでは持ちえなかった自分への視線を得ることももあるだろう。そんな風にして、それぞれの個人は世界と向き合うための基盤を作っていく。



安倍政権は、憲法の解釈を変更することで、集団的自衛権を容認してしまった。怖いことである。

秘密保護法の強行採決も含めて、これらは今の自民党が世論の支持を得ているという自信からの強行である。民意を得ていると言つ。しかしここでは、民意には、現在の民意とともに、歴史的な民意というものがあるといふことが忘れられている。

現在の民意というものは、常に揺れやすい不安定なものである。その時どきのプレを相対化するものとして、歴史という時間が参照され、政治という局面においては、憲法という不動の基準がある。

憲法は時々の民意というものの不安定さを修正するものとして、時代の風潮だけで変えてはならない基盤である。それを勝手に解釈変更して平然としているのは、幼い子が、世界は自分のためにまわっているとしか認識できないのと同じなのである。



幼い子

わが家に小さな子どもがやってきました。まだ一歳にもならない女の子である。世の中では孫と呼ぶらしいが、それが可愛いのである。

見ているといくつも発見がある。自分の子のときには見えていなかったことばかりである。

1947年、滋賀県生まれ。京都大理学部卒業。京大再生医科学研究所を経て、現在は京都産業大総合生命科学部教授。歌人で、短歌結社「塔」主宰。

※コラムへの感想をメールでお寄せください。  
minna@mb.kyoto-np.co.jp